

第1章 富士宮市の概要

1 自然的・地理的環境

(1) 位置

富士宮市は静岡県東部に位置し、富士山南西麓に広がります。広大な森林や豊富な湧水などの自然に恵まれ、市域の46%が富士箱根伊豆国立公園に指定されています。東西20.92km、南北32.63km、面積は389.08km²（県内第3位、境界未確定部分あり）で、富士山麓の約4分の1を占めます。

市域の東は富士市、南は富士市や静岡市、北から西は山梨県南部町・身延町・富士河口湖町・鳴沢村に接しています。このうち本市と富士市は、戦後まで富士郡と呼ばれる1つの区域で、歴史的に地理・経済・産業・文化・観光的なつながりが深く、現在も地域活性化や住民の生活向上を目指した連携事業を数多く行っています。また本市と山梨県は、富士山を囲んで隣接する自治体として道路網・鉄道網を通じて歴史的に商業・産業・文化の交流が盛んです。



図1-1 富士宮市位置図（国土地理院地図をもとに作成）

(2) 地形

富士宮市は富士火山の南西麓に位置し、その最高地点は、標高 3,776m の富士山山頂剣ヶ峰であり、次第に傾斜を減じながら南西に向かって富士山の山腹斜面が広がっています。また、市域の西端に、険しい壯年期浸食地形を示す 1,000～2,000m 級の天子山地が南北に連なっています。市域の最高地点と最低地点（標高 35m、山本石の宮地区）との標高差は 3,741m と日本一です。

市北縁は割石峠(根原付近)を境に山梨県側の
富士山北麓につながり、東縁はほぼ富士・愛鷹両
火山を結ぶ稜線を境に、御殿場市～裾野市域の富
士山東麓に接しています。南東縁は富士市域の富
士山南東麓に接し、南西縁は富士川を境にし、西
麓に沿ってほぼ南北に走る富士川河口断層帯の
各断層が、羽鮈丘陵や星山丘陵などを区画してい
ます。また富士川を挟ん
だ南側には、蒲原丘陵が
あります。

本市の河川は、富士山麓の河川と、富士川へ収束する河川とに大きく分けられます。前者の代表的なものに、富士山西斜面の大沢崩れを源として、西部から南東部を流下する潤井川があります。後者の例としては、北部の猪之頭湧水群を源として、天子山地の東縁を流下する芝川、天子山地を源として、稻子地区を流下する稻子川、静岡市清水区宍原を源として、内房地区を蛇行しながら流下する稻瀬川などがあります。

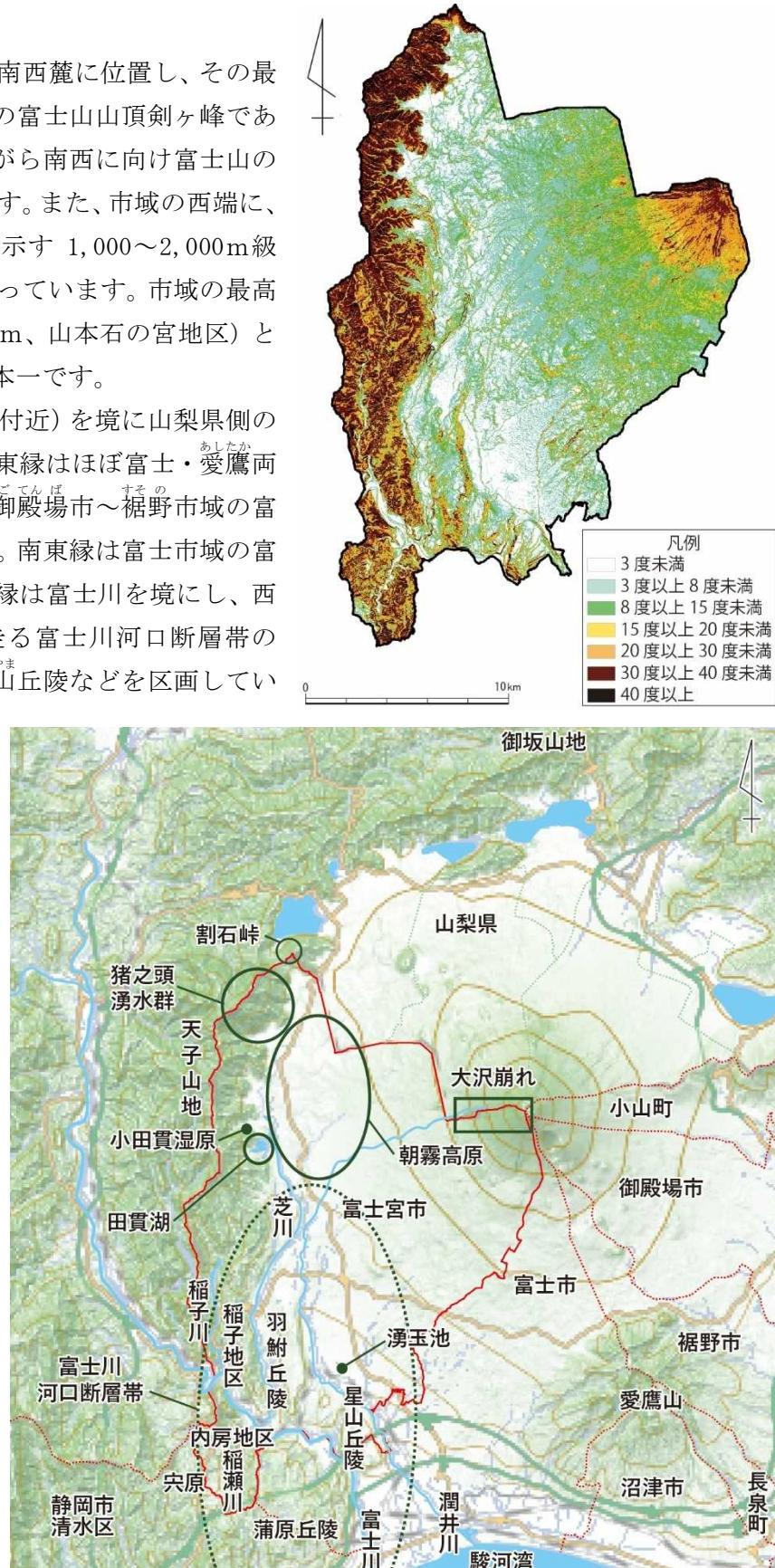


図 1-2 富士宮市の地形
 【上図】富士宮市の傾斜度区分図（国土地理院基盤地図情報を基に作成）
 【下図】富士宮市の地形と河川・丘陵など（地理院タイル（淡色地図・陰影起伏図）を加工して作成）

(3) 地質

富士山西縁の天子山地や市域南縁の富士川流域には、主に新第三紀中新世から鮮新世に至る地層が分布しています。これらは下部をなす中新世中期の主に西八代層群の地層と、上部をなす中新世後期～鮮新世の主に富士川層群の地層に大別されます。市域では、西八代層群の地層は天子山地北部に限られ、その南側の天子山地の大部分には富士川層群の地層が分布しています。含まれる堆積岩類は、西八代層群の地層は主に深海性の泥岩からなり、富士川層群の地層は主に乱泥流によってもたらされた関東山地に由来する碎屑物を多く含む厚い礫岩と砂岩からなります。また、市域南西部の富士川下流域、羽鮈丘陵や星山丘陵、蒲原丘陵には主に第四紀更新世前期の庵原層群の火山岩類や砂礫層からなる地層が分布しています。

これら第三紀～第四紀の地層を被い、10万年前以降に活動する富士火山の噴出物が主に芝川流域の東側に広く分布します。富士火山は古富士火山と新富士火山とに、さらに新富士火山の噴出物は旧期・中期・新期に分類されます（津屋、1968・1971）。それらは玄武岩質の主に溶岩と火山碎屑物からなります。古富士火山と新富士火山とは、約17,000～11,000年前の並行的な火山活動を挟み前後に分かれます（宮地、2007）。古富士火山はおよそ9万年に及ぶ火山活動の中で溶岩と火山碎屑物を交互に噴出し、寒冷な気候下での活動であったことから融雪などによる泥流堆積物も伴いました。また、爆発的な噴火に伴った山体崩壊による岩屑なだれ堆積物も認められます。それらの多くは新富士火山の噴出物に被われていますが、逆断層によって隆起した山麓の羽鮈丘陵や星山丘陵などに見ることができます。新富士火山旧期に噴出した溶岩や火山碎屑物は富士山麓の主に末端部に分布が見られます。さらにこれらを被い、中期から新期に噴出した噴出物が富士山麓の主に中腹部から山頂に向かって分布しています。

なお、本市は、日本列島を東西に分ける南北方向の大地溝帯「フォッサマグナ」に位置します。この大地溝帯は、およそ2,500万年前、ユーラシア大陸の東端部が裂けて日本海がで

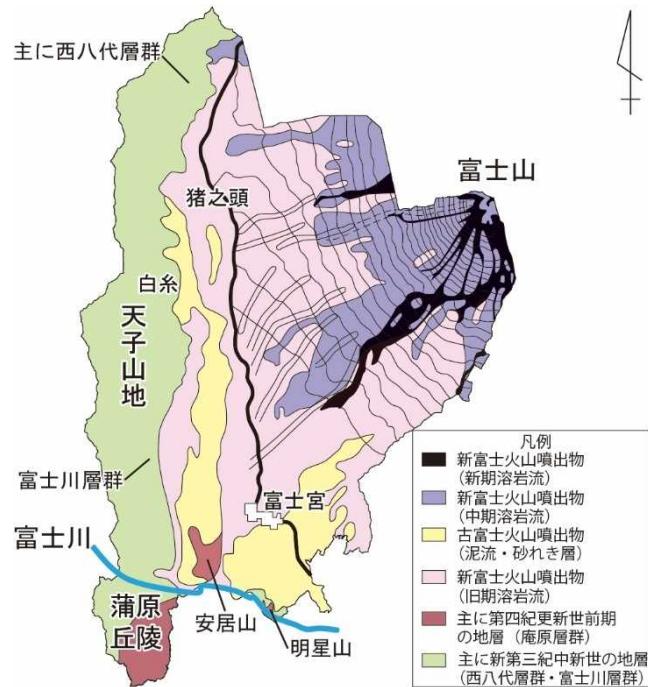


図1-3 富士宮市の概略地質図
(出典: 津屋弘達 (1968)「富士火山地質図 (5万分の1)」、同氏 (1971)「富士山の地形・地質」より作成)



図1-4 地質層序表

きた際、現在の東北日本と西南日本がそれぞれ観音開きの様に回転して開いたことでできました。フォッサマグナ地域は諏訪湖あたりを境に地質的な観点から北部フォッサマグナ地域と南部フォッサマグナ地域に分かれ、本市は後者に属します。

(4) 気候

富士宮市の気候は、地形や環境により地域ごとに違いが見られるものの、富士山頂などの極端な場所を除けば、夏は蒸し暑くて曇りの日が多いですが、冬は寒くて湿度が高いと言えます。気温は、北に進むほど海拔高度が増すため南暖北冷と言えます。しかし降雪は、北部地域でも年に1~2度ある程度で、市街地ではほとんどなく、生活するための気候条件に恵まれています。

平均気温は、昭和56年（1981）から平成22年（2010）の間では15.4度と、比較的温暖な静岡県内でも低く、最も低い1月の平均値が5.2度、最も高い8月の平均値が26.2度となっています。これは本市の標高が高いことによります。

降水量は、秋（9~11月）が最も多く、冬（12月~2月）が少なく、北に行くほど南寄りの風による地形効果によって多い傾向になります。これは、本市は北北東の富士山、西の天子山地により北からの風が遮られるため、年間を通じて南寄りの風が強く、特に夏は太平洋の湿潤な空気が流入して北の山地で上昇し、雨が多くなるからです。

また、市内では夏、特に6~7月は、富士山・御坂山地・天子山地に取り囲まれた市北部で霧の発生が増えます。季節による霧の発生の状況は、市内からの富士山の見え方から確認することができます。同じ晴れた日でも夏は富士山が霞んで見えることが多く、冬ははっきり見えることがあります。

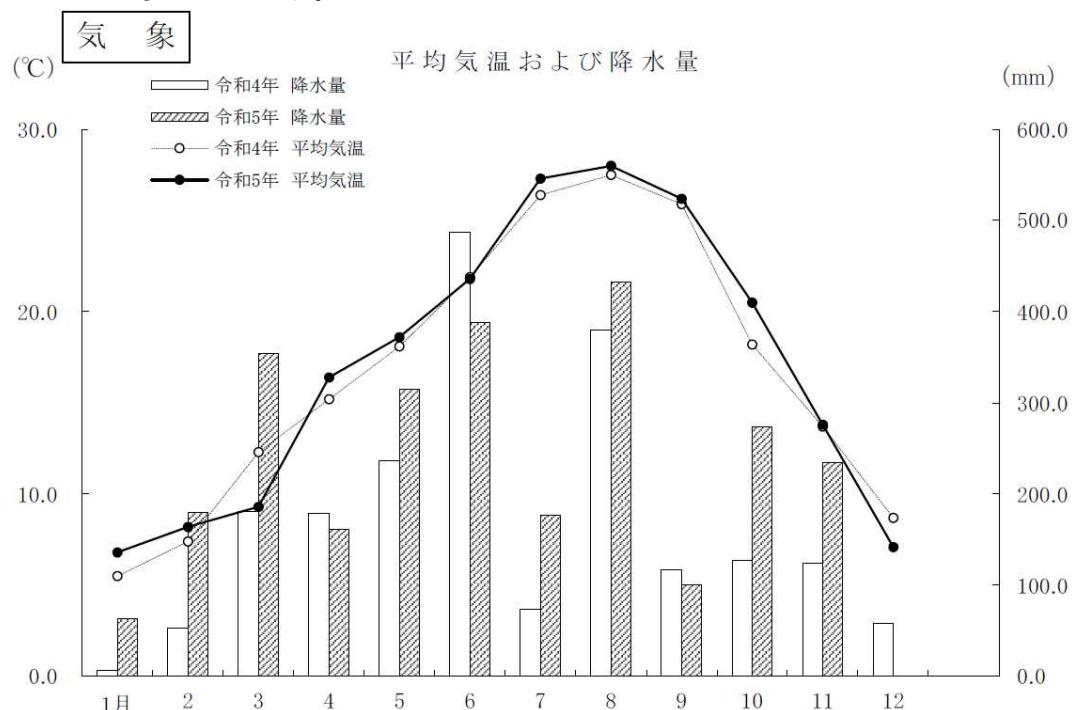


図1-5 令和4・5年（2022・2023）の月別平均気温・降水量
(観測値：富士宮市役所 出典：富士宮市の統計（令和6年度（2024）版))



写真 1-1 季節ごとの富士山の見えやすさ（左：夏、右：冬）

(5) 植生

富士宮市は、植物相の多様性に富んだ地域です。これは市域がフォッサマグナ地域に位置するため、いわゆるフォッサマグナ要素の植物と呼ばれる地域特有の植物（マメザクラ、サンショウバラ、フジアザミなど）が生育していること、富士山山頂から市街地までの標高差が大きいこと、朝霧高原や小田貫湿原、湧玉池（特別天然記念物）など特徴的な地域や地点があることなどによります。また、市域の森林の大部分を人工林が占めており、本市の植生の1つとして捉えることができます。

標高差による植物相の多様性の事例として、富士山の植物の分布をみていくと、森林植物帯区分は平地帯から高山帯に及びます。高山帯と亜高山帯の間には森林限界（写真 1-2、積雪の下方ライン）があり、その上は火山荒原植生のためコケ類や草本類が分布します。森林限界の最も標高が高い場所に、ミヤマヤナギ・ミヤマハンノキ・ダケカンバなどわい性低木が分布しており、その下の標高 1,800～2,400m の亜高山帯にはシラビソ・トウヒなどの常緑針葉樹林や落葉針葉樹のカラマツが分布します。標高 900～1,600m の山地帯には、ブナ・ミズナラ・イタヤカエデなどからなるブナ群落が分布します。標高 350m～570m の丘陵帯には、モミ・ツガなどの針葉樹が混交し、クリ・コナラ・ケヤキなどの落葉樹が分布します。標高 0～350m の平地帯には、アラカシ・アカガシなどのカシ類の他、クロマツ・タブ・スダジイなどが分布します。



写真 1-2 西臼塚駐車場から見た富士山
(出典：富士宮市（2023）『富士宮の歴史 自然環境編』)

垂直分布 (気候帶)	森林植物帯名	標 高
高山帯 (寒帶)	コケ帯 (高山コケ帯)	3000～3776m
高山帯 (亜寒帶)	オントデ帯 (高山草本帯)	(2400)～2850～3000m
亜高山 (亜寒帶)	シラベ帯 (亜寒帯針葉樹林)	1800～(2400)～2850m
山地帯 (冷温帶)	ウラジロモミ帯 (冷温帯針葉樹林)	1600～1800m
山地帯 (冷温帶)	ブナ帯 (冷温帶落葉樹林)	900～1600m
丘陵帯 (暖温帶)	クリ帯 (暖温帶落葉樹林)	(350)～570～900m
平地帯 (暖温帶)	カシ帯 (暖温帶照葉樹林)	0～(350)～570m

表 1-1 富士山西南麓の森林植物帯区分
(出典：渡邊定元（2002）「富士山の植物」、国土交通省地方整備局富士砂防事務所『富士山の自然と社会』)

植生が特徴的な地域や地点のうち、朝霧高原はかつて開拓が行われ、現在は広く牧草地となっていますが、ところどころに自然草原や雑木林が残存しています。

小田貫湿原は、現在、富士山南西麓で唯一の湿原で、富士山麓では貴重な^{しつせいいよくぶつ}湿生植物群落が発達しており、湿原の中央部には水が停滞する池が数個あり、それを取り巻くように湿生の植物が分布しています。

湧玉池は、主に富士山に降った雨や雪解け水が湧き出し、自然湧水池になったもので、湧水の水温、水質などから湧水特有の水草を見ることができます、近年コカナダモなどの外来種も多くみられるようになっています。

人工林は、明治時代の植林と、昭和30年代の木材の需要の高まりを受け、国策として行われた拡大造林によるもので、現在、本市の民有林 18,274.6ha の 77%にあたる 14,067ha が人工林であり、そのうち 94%をスギ・ヒノキが占めています。



写真 1-3 小田貫湿原
(出典：『富士宮の歴史 自然環境編』)



写真 1-4 湧玉池
(出典：『富士宮の歴史 自然環境編』)

2 社会的状况

(1) 市域の形成

奈良時代に律令制度によって定められた国郡制では、市域の富士川以東は駿河国富士郡、以西は駿河国庵原郡に該当します。明治初年に、江戸時代から存在した町村の合併（万野原新田のみ分立）が進み、明治 22 年（1889）の町村制の施行により、成立した富士郡 1 町 8 村・庵原郡 1 村が、現在の市域の基となりました。

昭和に入ると、戦時体制の強化や紀元 2600 年記念を機に市町村合併が進みました。その中で昭和 17 年（1942）、県下最大の町であった大宮町は隣村の富丘村と合併して市制を施行、「富士宮市」が誕生しました。なお市名の由来は、『今昔物語』に登場する浅間大社の別名と考えられる「駿河ノ国ノ富士ノ宮」です。

戦後になると、昭和 28 年の町村合併促進法に基づいて社会の変化を受けて全国的に市町村合併が促進され、いわゆる昭和の大合併が行われました。市域でも合併が進められ、昭和 30 年（1955）に富士根村が、同 33 年（1958）に上野村・北山村・上井出村・白糸村が富士宮市に合併しました。また芝川地域では、昭和 31 年（1956）に富士郡芝富村と庵原郡内房村が合併して富原村が誕生し、翌 32 年（1957）には柚野村と合併して芝川町となりました。その後長く 1 市 1 町が続き、いわゆる平成の大合併で、平成 22 年（2010）、富士宮市と芝川町と合併し、現富士宮市域となりました。

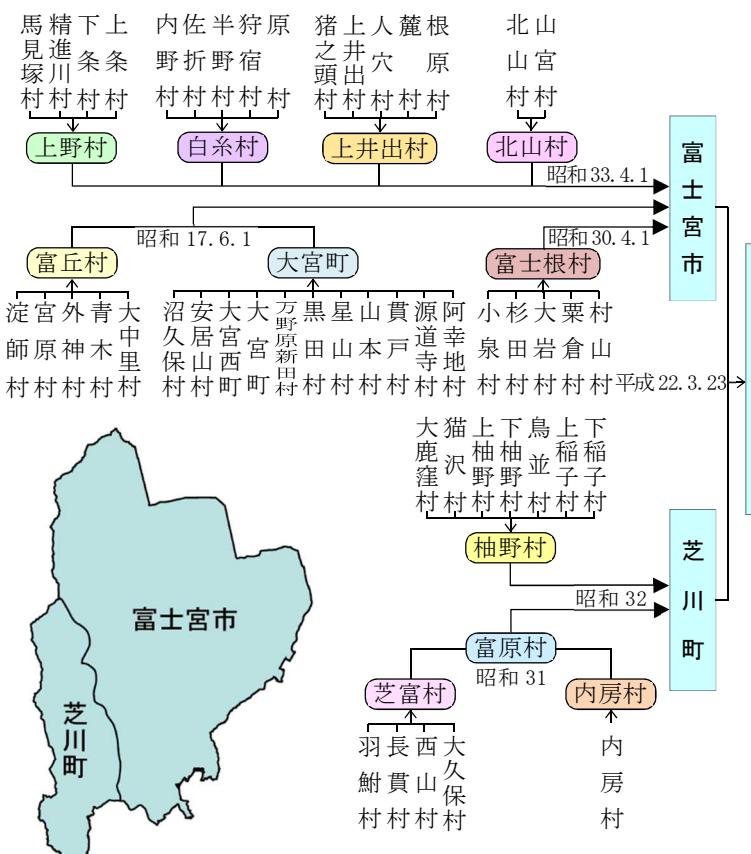


図 1-6 市域の変遷

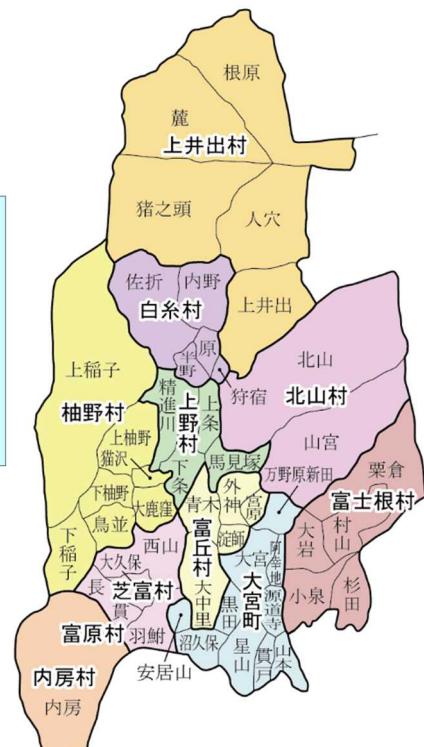


図 1-7 富士宮市の旧村の位置

(2) 人口推移

本市の人口は昭和60年（1985）以降の国勢調査によると、平成22年（2010）以降減少傾向にあります。令和7年（2025）8月で126,147人（住民基本台帳）で県内8位ですが、令和32年（2050）までには96,298人に減少すると推計されています。

人口構造は、15歳未満人口（年少人口）が昭和60年（1985）以降、15～64歳人口（生産年齢人口）が平成22年（2010）以降減少しています。一方で65歳以上人口（高齢者人口）が昭和60年（1985）以降増加を続け、高齢化率は9.6%から30.6%と約3.2倍となりました。高齢化率は今後も高まり、令和32年（2050）までに40%を上回ると推計されています。

社会的動態は、平成26年（2014）から転出者数が転入者数を上回っています。大きな要因として、大学進学時や就職時における首都圏などへの転出者数が、大学卒業後の転入者数（Uターン数）を上回っている点にあります。特に東京への転出超過が目立ちます。

これに伴い、労働者や消費者の減少による地域経済の衰退、社会保障費を負担する現役世代の減少による社会保障制度への影響、地域コミュニティの担い手の不足による地域への影響、税収の減少により行政サービスや公共建築物などの維持管理・更新が困難になるといったことが懸念されます。

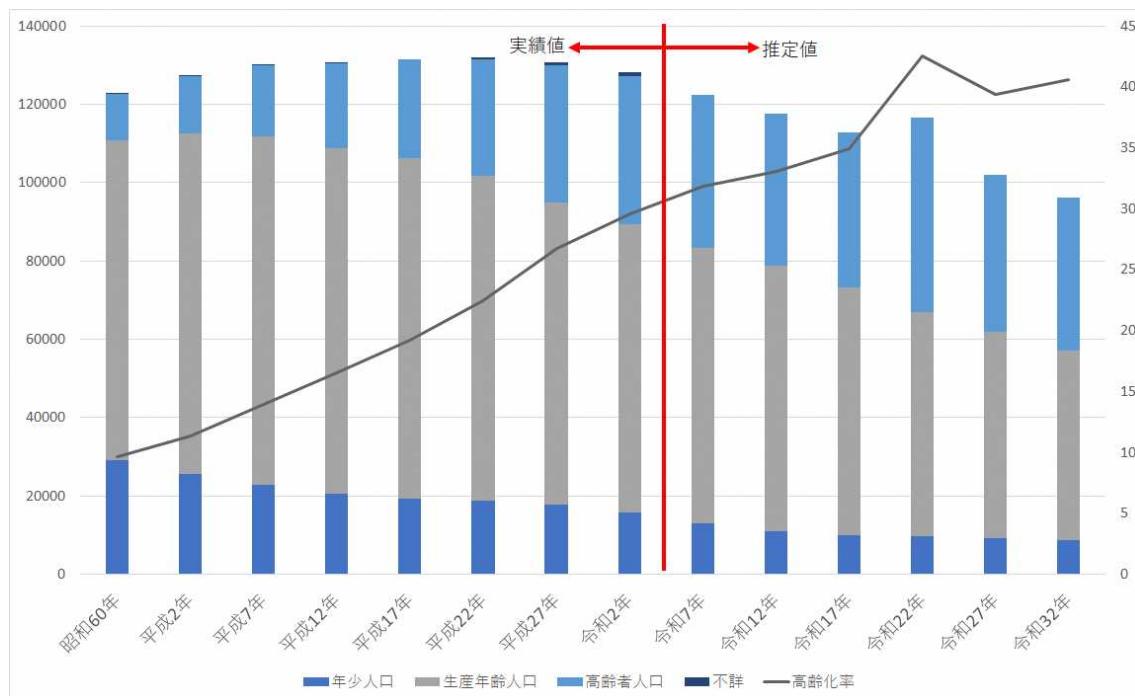


図1-8 人口及び年齢3区分別人口の推移
(出典：『国勢調査・日本の地域別将来推計人口』(令和5年(2023) 推計))

(3) 交通

市内には古くから、駿河国（静岡県東部）と甲斐国（山梨県）を結ぶ南北の街道が通っており、人と物の交流が盛んでした。その一部の区間は、現在も国道139号（富士宮道路・バイパス）として利用されています。昭和57年（1982）、バイパスと西富士道路が接続し、東名高速道路や国道1号への連絡もよくなり、平成24年（2012）には新東名高速道路（平成24年開通）と接続し、東京-愛知との結びつきが強まりました。さらに平成31年（2019）には中部横断自動車道が開通、令和3年（2021）には国道469号（富士山南麓道路）が延長したことで、近年山梨県との結びつきが強まっています。

市内の公共交通は、鉄道・バスが主なものとなっています。鉄道は、山梨県甲府市と本市を結び東海道本線と接続するJR身延線が通り、市内には「源道寺駅」「富士宮駅」「西富士宮駅」「沼久保駅」「芝川駅」「稻子駅」があります。

バスは、富士急静岡バス（株）の8路線が運行されています。これらは日常的な地域の足や、市郊外と中心市街地間の移動手段、富士市・山梨県などにまたがる広域的な交通手段として、路線の特性に応じた利用がされています。この他に、世界遺産富士山の構成資産や市北部地域の主な観光地を巡る定期観光バス「**強力くん**」^{こうりきくん}が運行されています。

また、本市では、市街地循環バス「宮バス」とデマンド型乗合タクシー「宮タク」を運行しています。これらは中心市街地の活性化を図るとともに、路線バスの廃止により生じた交通空白地域や交通不便地域と中心市街地間の生活交通を確保しています。

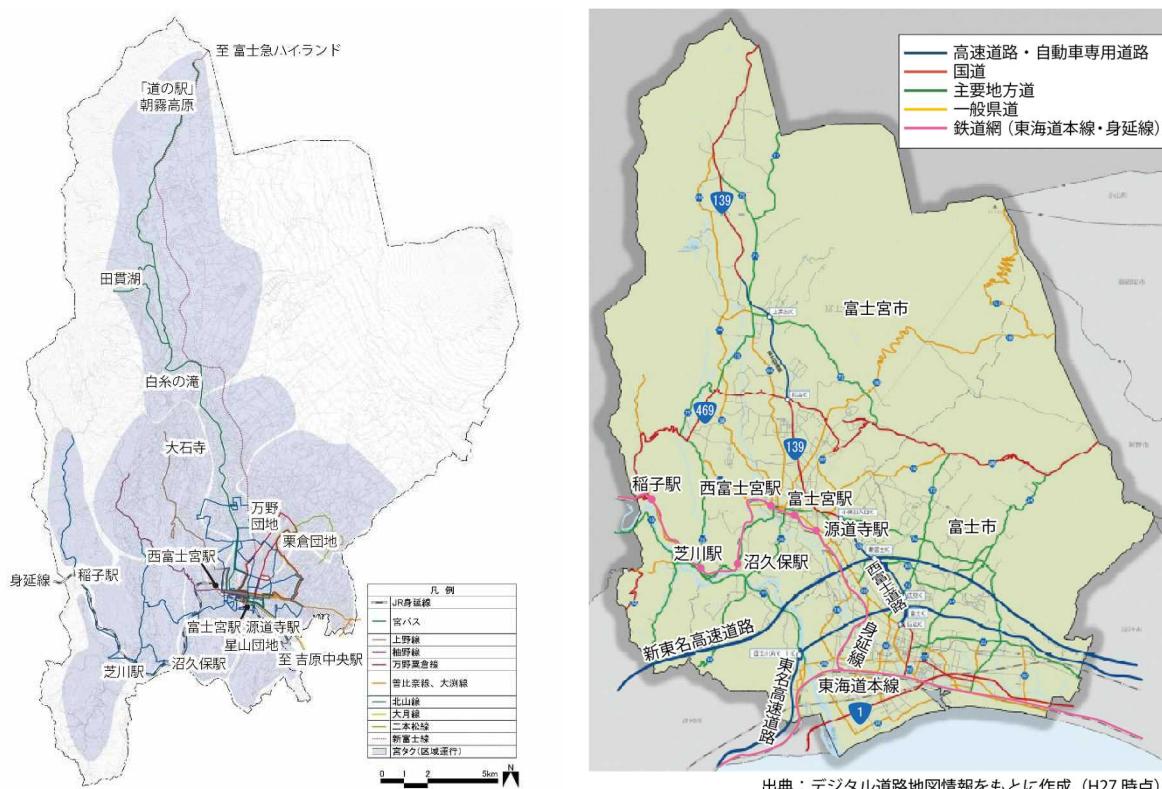


図 1-9 市内・周辺の交通網

(出典:【左図】市内の公共交通網(富士宮市)

【右図】市内の道路網（岳南都市圏総合都市交通計画協議会（2019）『岳南都市圏総合都市交通体系調査報告書』掲載の「道路網図」を一部加筆）

(4) 産業

富士宮市では自然環境などを活かした様々な産業が展開しています。

第1次産業は、農業・畜産業・養鱒業などが盛んです。北部地域の朝霧高原では、広大な土地・水はけのよい土壌・寒冷な気候を活かした畜産、東部から南部地域では温暖な気候と水はけのよい土壌を活かした畑作（露地野菜や茶など）が盛んです。富士山の綺麗で豊富で安定した水温の伏流水に恵まれた猪之頭や淀師・青木・大中里、市内南部の潤井川沿いの地域では、これを活かした養鱒・ワサビ栽培が、河川や用水路、湧水などにより水が豊かな北西部から南部地域では、稲作が盛んです。

第2次産業は、明治時代以降、わが国の急速な近代化に伴い、市南部において富士山の豊富で綺麗な水を利用した製紙工業を中心に工業振興が図られました。その後市内に多くの工業団地が造成され、豊かな自然環境、清浄な空気、首都圏への交通アクセスの良さを背景に、精密機械や、医療機器・食・飲料製造に係る企業も進出しています。また芝川や潤井川、用水路などをを利用して明治時代から水力発電事業が行われており、現在市内には数多くの水力発電所があります。

第3次産業は、観光業を中心に発展しており、富士山麓の白糸の滝や朝霧高原などの豊かな自然や文化財、「富士宮やきそば」などの地元特産品を活かした商業活動が盛んです。



写真 1-5 畜産業（牧場）・製造業（工業団地）・観光業（キャンプ場）
(出典：富士宮市企業紹介ガイドブック)

(5) 観光

富士宮市の観光資源は世界遺産富士山をはじめ、清涼な水や空気、雄大な自然と美しい景観、富士山本宮浅間大社を中心とした歴史文化、富士山の自然の恵みに育まれた豊富な食資源などです。中でもアウトドアを楽しむことができる朝霧高原や田貫湖周辺と、文化財が集中する浅間大社周辺は来訪者数が多くなっています。

本市の観光客数は、年により増減はあるものの令和元年度（2019）まで増加傾向にあり、令和元年度（2019）は年間約592万人が訪れていました。令和2年（2020）初頭からの新型コロナウイルス感染症の拡大により激減しましたが、令和5年（2023）には以前の水準まで回復しました。

しかし、富士登山は、観光客が集中することによって起こるオーバーツーリズムが懸念されています。

また本市を訪れるのは、伊豆箱根、富士五湖などのほかの観光地に向かう途中に立ち寄る日帰りの観光客が多く、市内の滞在時間が短いという課題があります。そのため本市は、富士山と市内にある6か所の構成資産と従来の観光地・観光資源をつなぎ、地域内周遊・滞在の促進に取り組んでいます。

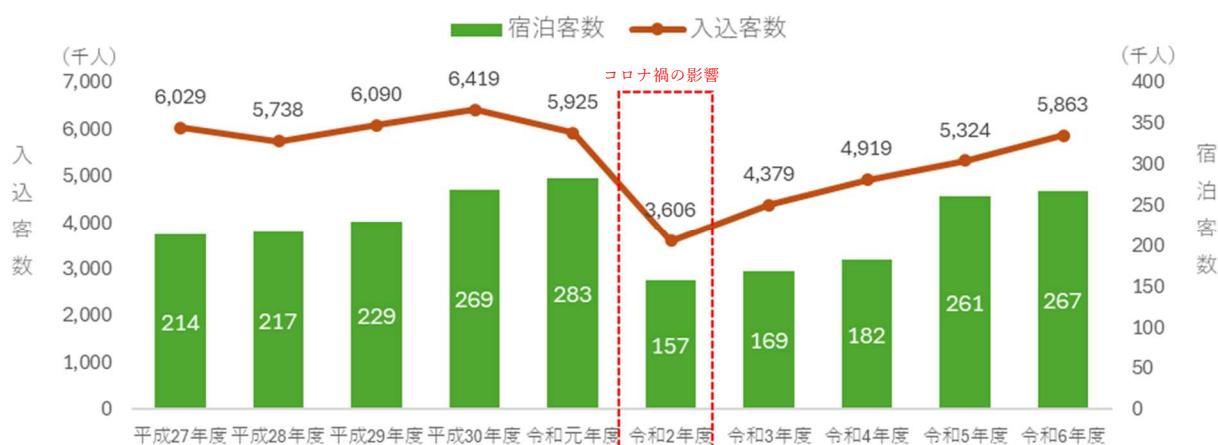


図1-10 富士宮市の入込客数・宿泊数
(出典：第4次富士宮市観光基本計画)



朝霧高原エリア 朝霧高原、田貫湖など
富士山エリア 富士登山・宝永トレッキング・富士山休養林等
白糸エリア 白糸ノ滝・狩宿の下馬桜など
まちなかエリア 浅間大社、富士山世界遺産センター、お宮横町など
芝川エリア 里山・遺跡・伝説など
その他 宿泊客、やきそば店など

図1-11 市内観光エリアごとの入込客数の年度推移とエリア区分
(出典：第4次富士宮市観光基本計画)

(6) 文化財に関する施設

富士宮市には、文化財に関する市営の施設として富士宮市立郷土資料館（以下「郷土資料館」）と富士宮市埋蔵文化財センター（以下「埋蔵文化財センター」）、世界遺産の構成資産である山宮浅間神社・村山浅間神社・人穴富士講遺跡・白糸ノ滝に設置された案内所（ガイダンス施設）があります。令和3年度（2021）から指定文化財などの重要な古文書などについては、芝川会館に収蔵しています。

また令和3年度（2021）に、貴重な文化財を保管し、本市の豊かな歴史や文化を後世に伝える博物館の整備を目指し、「(仮称) 富士宮市立郷土史博物館基本構想」を策定しました。

●郷土資料館（富士宮市宮町14番2号）

昭和45年（1970）開館。現在は富士宮市民文化会館内にあり、展示室では収蔵資料を活用した企画展を年2～3回開催しています。（令和7年（2025）8月現在市民文化会館改修に伴い休館中）

●埋蔵文化財センター（富士宮市長貫747番地の1）

旧芝川町保健センターを改修し、平成26年（2014）開館（本館：1,373m²、別館：178m²）。古文書や民俗資料、埋蔵文化財などを一括して保存管理するとともに、一部資料を展示・公開しています。

●芝川会館（富士宮市長貫1131番地の6）

市指定・県指定などの重要な古文書などを2階会議室（50m²）に収蔵しています。

●案内所

平成25年設置。世界遺産「富士山」の顕著で普遍的な価値、各構成資産の価値及び構成資産の関係性について来訪者の認知・理解を促進することを目的に、パネルなどの展示を実施しています。



写真1-6 富士宮市埋蔵文化財センター



写真1-7 芝川会館2階会議室

また、静岡県立の富士山世界遺産センターと一般財団法人地球の石科学財団が運営する奇石博物館、国設の自然学校第一号の田貫湖ふれあい自然塾があります。この他に、富士宮市観光協会が運営し、本市の観光の情報拠点の役割を担う富士宮駅前観光案内所や、富士宮市観光ガイドボランティアの会が活動拠点とする、寄って宮観光案内所があります。

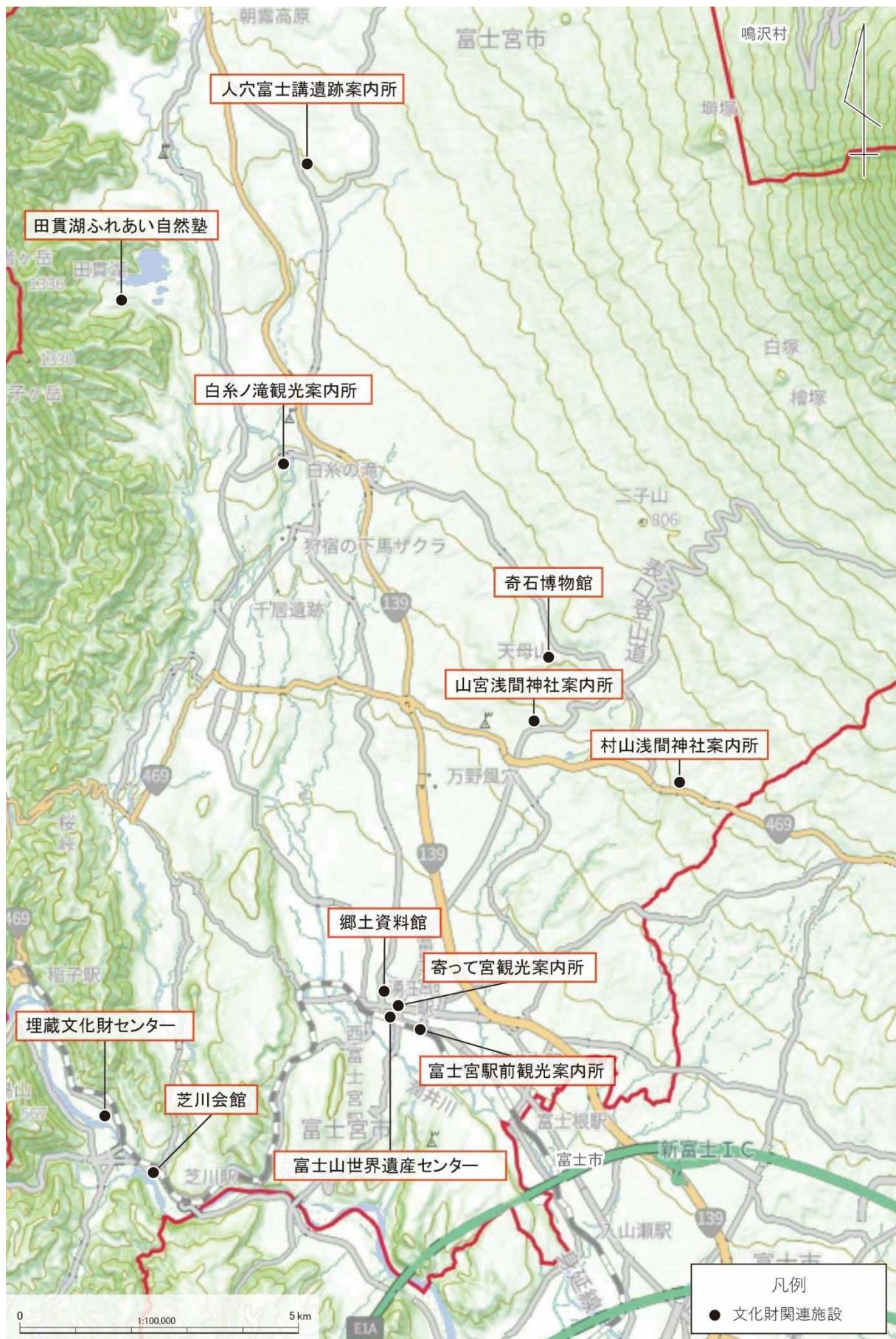


図 1-12 市内の文化財関連施設位置図（地理院タイル（淡色地図・陰影起伏図）を加工して作成）

3 歴史的環境

富士宮市の歴史的環境について、時代ごとに順を追って説明します。

(1) 先史・古代（旧石器～平安時代）

富士宮市における人々の活動は、旧石器時代（約40,000年～16,000年前）後期から始まります。この時期の市内の遺跡として確実なものは2遺跡であり、いずれも河川を望む丘陵上に立地しています。この時代は、定住をせず食料となる大型の動物を追って移動しながらの生活であったと考えられます。

縄文時代（約16,000～2,800年前または2,400年前）に入り温暖化が進むと、環境や動植物の生態系に変化が生じ、動物を追いかけて移動を繰り返していた人々は、その変化に対応して煮炊きする土器を作るようになり、定住生活を送るようになります。縄文時代の最初期にあたる縄文時代草創期（約16,000～11,500年前）には、国指定史跡大鹿窪遺跡（大鹿窪）で集落が営まれました。ここから出土した黒曜石の石器の多くが神津島産で、当時から広域の交流があったことを物語っています。

縄文時代早期（約11,500～7,000年前）に入ると、本市では狩猟などに適した丘陵や裾野の湧水地点などに集落が営まれます。その1つである若宮遺跡（小泉）では、関東地域を中心に出土する撚糸文系土器と、東海地域から西日本を中心として出土する押型文系土器が出土しており、この場所が2つの文化圏が重なる場所であったことが分かります。

縄文時代前期（約7,000～5,500年前）になると本市で確認できる遺跡は減少しますが、中期（約5,500～4,500年前）になると以前の時期よりも遺跡が増加します。この時期、河川流域だけでなくそれまで集落の痕跡がなかった山間地に人々が住むようになります。また、この時期から中部高地を中心として出土する土器が確認されるようになり、当該地の土器文化が流入してきたことが分かります。しかし、後期（約4,500～3,300年前）から晩期（約3,300～2,400年前）にかけて、市内の遺跡の数は減少してきます。これは中期の終わり

ごろから富士山の火山活動の影響を大きく受け、人々が生活していくことが難しくなったためと考えられています。

弥生時代（約2,800または2,400～1,800年前）に入ると、日本列島に青銅器や鉄器、水田耕作（稻作）が伝えられ、全国的に社会が急速に変化していきます。しかし本市では、弥生時代中期以前の遺跡は現在確認できません。弥生時代後期になると潤井川流域の水田可耕地となる低地のほか、水田稻作に不向きな星山丘陵などの高台に集落が営まれるようになります。



写真1-8 大鹿窪遺跡（大鹿窪）



写真1-9 千居遺跡（上条）

人々は水田稲作や畑作など土地に合わせた多様な生業を営んでいたと考えられます。低地や丘陵といった性格の異なる場所で生活した点から、稲作以外にも畑作や狩猟採集を主とした生業もあり、多種多様な生活があったのではないかと考えられます。弥生時代の終末期段階に入ると、後期までは遺跡が希薄であった小泉・大岩地域でも遺跡が確認されます。中でも丸ヶ谷戸遺跡（大岩）では、東海西部地域をはじめとした、近畿地域、北陸地域などの外系の土器が多く出土しており、地域間との交流が盛んになったと考えられます。また、それまで本市には無かった東海西部地域の文化の影響を受けた前方後方型墳丘墓が造営されたことからも新たな人々の流入が考えられます。

古墳時代（約1,800～1,300年前）に入ると、全国的に首長（地域ごとの政治的なリーダー）の古墳が造営されるようになります。古墳時代前期は弥生時代後期から引き続いて遺跡が展開しますが、中期には遺跡が激減します。これは、富士山の火山活動の影響が考えられます。本市で古墳が築造されるのは、古墳時代中期の終わりからです。この頃、神田川の沖積地には浅間大社遺跡や大宮城跡（元富士大宮司館跡）（宮町）が確認されます。後期に入ると、市指定史跡の大室古墳（小泉）や鉄製銀象嵌鍔や馬具、玉類が出土した別所一号墳（安居山）などが造営されました。

奈良時代に律令制が成立すると、現在の富士・富士宮市域のほとんどが駿河国富士郡の領域と定められました。富士市域では、東平遺跡に郡衙（役所）跡や多くの建物跡などが認められますが、富士宮市域では平安時代中期まで、小規模な遺跡しか確認されていないため、衛星的な集落が点在していたと考えられます。

平安時代前期の9世紀に富士山の噴火があり、噴火の鎮静を祈る社が駿河国内にあったことが公式文書に記されていますが、この社が浅間大社を指すかは不明です。

平安時代中期の10世紀に駿河守に就任した平兼盛が御手洗川辺で行われた臨時の祭祀に参列しており、この頃に浅間大社が現在の位置にあったと考えられています。そして平安時代後期に富士山の噴火活動が沈静化すると、富士山は修験者たちの修行の場となり、末代のように埋経や寺院の建立をする僧が現れます。

（2）中世（平安時代末期～戦国時代）

平安時代末期の治承4年（1180）8月17日、伊豆国に流されていた源頼朝は平氏討伐を命じる以仁王の令旨に応じ挙兵しました。頼朝は石橋山の戦いで平氏方に惨敗するも、鎌倉を拠点に勢力を拡大しました。

この頃、甲斐・信濃国（山梨・長野県）を拠点とする甲斐源氏も挙兵し、富士山北麓で起



写真 1-10 丸ヶ谷戸遺跡（大岩）



写真 1-11 大室古墳（小泉）

こった2つの戦い（波志太山の戦い・鉢田の戦い）で、平氏方に勝利しました。鉢田の戦いは、若彦路と神野・春田路を通って南下する甲斐源氏と、富士野を通って北上する平氏方の戦いででした。神野・春田路は甲州街道（中道往還）、富士野は本市北部地域に比定され、この頃には、本市を通り駿河・甲斐両国を結ぶ南北の道があったことが分かります。

鎌倉時代の建久4年（1193）、征夷大将軍となつた頼朝は、將軍権力の誇示と交通路の掌握のため「富士の巻狩」を行いました。市内では駿河・甲斐国を結ぶ交通の要衝であった「富士野」が開催地となりました。市内には現在も富士の巻狩に関係する伝承が数多くあります。頼朝の跡を継いだ頼家も建仁3年（1203）に、富士の巻狩を行い、その際に家臣の仁田忠常に「浅間大菩薩の御在所」とされる人穴を調査させています。

また、富士郡（現在の富士・富士宮市域を中心とする地域）は鎌倉時代初期から鎌倉幕府の執権である北条氏が地頭職を持つなど、北条氏との深いつながりがありました。鎌倉時代中期に得宗（北条氏の嫡流家）の領地を管理するため、その家臣である南条氏の庶流が、市内へ派遣されていました。上野郷に派遣された南条兵衛七郎の子の時光は、身延山（山梨県身延町）に入山した日蓮の強力な後援者となり、さらに日蓮の死後、身延山を退去した高弟の日興も受け入れ、大石寺・北山本門寺・妙蓮寺の建立に大きく関与しました。

南北朝時代以降、駿河国は守護である今川氏が治めるようになりました。しかし富士郡の上方（現在の富士宮市を中心とする地域）においては、浅間大社の長官家である富士一族が大きな力を持っていました。富士氏が拠点とした大宮は、浅間大社の門前町であり、本市を縦断する甲州街道（中道往還）上の要地として発展しました。室町時代後期になると、大宮を通り村山を経由して山頂に至る大宮・村山口登山道が整備され、それまで修行の山だった富士山は一般的の道者（登拝者）も受け入れるようになり、登山拠点となった大宮や村山は多くの道者で賑わいました。



図1-13 鉢田の戦いと街道
(国土地理院地図をもとに作成)



図1-14 曾我物語之内 夜討（市蔵）

戦国時代の永禄11年（1568）に始まった今川氏と武田氏との戦いで、今川方の富士氏は大宮城に籠城し武田氏を苦しめましたが、やがて降伏しました。今川氏の後、駿河国は武田氏が治めるようになり、武田氏も天正10年（1582）、織田・徳川・北条氏に敗北し、駿河国は徳川氏が治めるようになりました。この年、甲斐国から近江国へ帰還する途中の織田信長は、甲州街道を通って市内各所を訪れています。

天正10年（1582）、北山本門寺の願いで徳川家康が、芝川の横手沢（内野）を取水源とする北山用水（本門寺用水）を開かせたと伝わります。市内ではこれ以後、近世に用水路が開削されました。

天正18年（1590）、戦国大名北条氏が滅亡すると、豊臣秀吉の命令で徳川氏は関東移封になりました。駿河国は秀吉の家臣である中村一氏なかむらかずうじが治めるようになりました。

（3）近世（江戸時代）

江戸時代前期、本市域の村々は寺社領か天領（江戸幕府領）で、天領の支配は大宮代官や駿府代官といった幕府代官が担いました。その後元禄11年（1698）に「地方直し」（蔵米を支給していた旗本に知行地を与える政策）が行われ、村々は寺社領・天領・旗本領などに分割されました。

こうした村々の支配とは別に、富士山麓の一定の標高以上の森林は、幕府の用材確保などの目的で幕府の直轄林（御林）として管理されました。御林は、幕府が御林守を任命してその管理に当たらせました。その下に広がる山麓の原野は複数の村の入会地として、牛馬の飼料あるいは田畠の肥料、家屋材のための草木採取などが行われました。

また江戸時代、本市と甲斐国（現山梨県）との間で人や物資の往来が盛んでした。それを促したのが、甲州三河岸（鰍沢・黒沢・青柳、現山梨県富士川町）から岩淵（現富士市）を結ぶ富士川の舟運や、甲州街道（中道往還）、甲府から興津宿へ至る駿州往還、身延山への参詣路である身延道、甲斐国の郡内地方と人穴・上井出地区を結ぶ道（人穴道・郡内道）、富士川の東岸と西岸を結ぶ渡船といった様々な交通路でした。中道往還の宿の一つである大宮町は、江戸時代以前と同様富士登山の起点で、人・物資が集中する交通の要地であるとともに、そこに住む商人は、駿河半紙やたばこ・茶などの特産品を村々から買い入れ、江戸や大坂へ出荷する中で、産業のまちとしての色彩を濃くしました。同じく甲州街道の宿である人穴宿は、江戸時代中期以降、関東を中心とした富士講が流行し、北口（吉田口・現山梨県富士吉田市）経由で道者が人穴の参拝に訪れました。



写真1-12 信玄がのろし台を築いたと
伝わる白鳥山（内房）
(出典：『富士宮の歴史 自然環境編』)

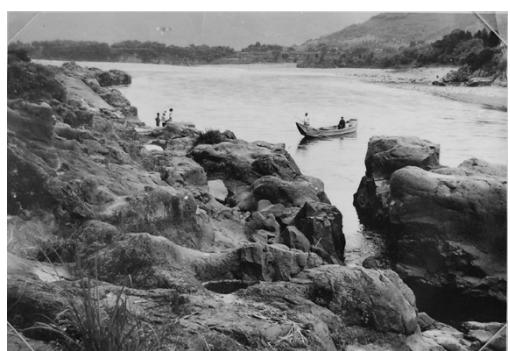


写真1-13 明治時代以降の沼久保の渡船（市蔵）

こうした往還沿いの宿場を除くと、市域の集落の大半は田畠が広がる農村でした。江戸時代の初めは河川に近い村々は稻作を行い、残る多くの村々は畑作を行いましたが、次第に芝川や潤井川・湧水を水源とする用水路の開削・拡張が進み、新田開発が進んでいきました。現在市内有数の上野地区や柚野地区にある水田地帯は、江戸時代以降の用水路の開削により生まれました。また用水路にかけられた水車は、精米や製粉などの動力に使われました。

本市の発展に寄与した用水路ですが、開削や維持管理は容易ではありませんでした。北山用水のように広域を潤す用水路は、水路が富士山の沢を横切る必要があったため、村々では用水路の維持や豪雨や融雪時に沢を流下する富士山からの雪代や土石流への対策に苦心していました。また水源から遠い万野原では用水路の開削が容易に成功せず、江戸時代をとおして何度も用水路の開削が試みられました。

(4) 近現代（明治時代～）

慶応3年（1867）、江戸幕府15代将軍の徳川慶喜が政権を返上しました。徳川家は朝敵ちょうてきとされました。後に家名存続を赦され駿河・遠江国を治める静岡藩の藩主となりました。旧幕臣ぱくしんの中には徳川家に従い移住する者もあり、静岡藩は旧幕臣のために、各地で帰農・開墾などの授産事業を進めました。開墾地の1つに選ばれたのが万野原で、明治元年（1868）に約250戸の士族が入植しましたが、厳しい生活環境のため、あまり定着しませんでした。この地区の人口が増加するのは、昭和の上水道設置以降のことです。

明治22年（1889）に東海道線が開通すると、翌年6月、富士製紙会社と大宮町の池谷繁太郎の尽力により、東海道線の鈴川駅（現吉原駅）と大宮町を結ぶ馬車鉄道が開通し、人や物資の輸送が迅速に行われるようになりました。明治42年（1909）に大宮一上井出を結ぶ富士軌道が敷設され、村部と大宮町を結ぶ庶民の足となるとともに、富士山の原始林から伐り出した木材の搬出に力を發揮しました。昭和3年（1928）に「富士身延鉄道」（現JR身延線）が全線開通し、富士川舟運に代わる交通路として利用されるようになり、山梨県から本市へ買い物、仕事、学校などに来る人が増え、駅沿いの西町商店街は賑わいました。こうした交通網の発達などにより、富士登山者の増加と登山の観光化が進み、それ以前の富士登山に見られた信仰の意味合いは次第に薄くなっていました。

なお富士川各所の渡船は、昭和34年（1959）に永久橋（蓬莱橋）が架かるまで見られました。特に沼久保一松野（富士市）間の渡船は、富士川舟運の衰退後も、身延線で通勤・通学する人などが利用しました。



写真1-14 江戸時代初期頃に開発された大堰用水（上条他）



写真1-15 身延線を走るSL（出典：遠藤秀雄編（1973）『目でみる富士宮の歴史』）

また、明治時代以降、富士山がもたらす豊富な水が、製糸業・製紙業など様々な産業に利用されるようになりました。さらに製紙工場は明治40年代以降、芝川・潤井川流域に水力発電所を設立して電化を進め、余剰電力を周辺地域へ販売するようになりました。このことにより、市内に電力の普及が進みました。現在市域には30を超える水力発電所があり、中には明治時代に作られた発電施設もあります。昭和時代に入ると、芝川水系の猪之頭に静岡水産試験場富士養鱒場^{しづおかすいさんしけんじょうふじようそんじょう}が開設されたのを皮切りに、市内でニジマスの養殖が盛んになりました。

第二次世界大戦中の昭和17年（1942）、上井出に陸軍少年戦車兵学校が開設され、富士山西麓はその演習地となりました。戦後、広大な演習地は食料増産などを目的とした開拓地となり、西富士長野開拓団^{せいふじちやうたくだん}などが入植しました。昭和29年（1954）、朝霧高原は国から「高度集約酪農地域」の指定を受け、本格的な酪農経営が始まりました。

また昭和39年（1964）からは国・県により、富士山西斜面に位置する大沢崩れの雪代と土石流から下流を守るため、富士山の砂防工事が始まりました。さらに富士山から流れ出る多くの川が合流し、大沢崩れなどからの土砂流出も盛んな潤井川については、防災対策として昭和49年（1974）に星山放水路が設置されました。以降も台風や集中豪雨が原因となる洪水対策や土石流対策が続けられています。

平成4年（1992）、日本は世界遺産条約に批准し、世界遺産候補地として暫定一覧表づくりに取り掛かりました。平成18年（2006）から行われた一覧表への記載公募に対して、静岡・山梨両県と本市をはじめとする関係市町村は共同で富士山を提案し、文化遺産としての登録を目指すことになりました。本市は市内の構成資産を保護・保全するための保存管理計画と世界遺産にふさわしい文化財整備を行うための整備計画を策定しました。また、広く文化的価値を伝えるためのガイドブックの作成、登録気運を高めるための啓発フラッグの掲示などの活動に、市民と共に取り組みました。合わせて富士山の保存管理のためのより具体的な対策の検討を行う組織や、登録実現及び価値の構成継承の意識の醸成を目的とした民間を中心とした組織も立ち上げました。

こうした活動が結実して、平成25年（2013）、カンボジアで開かれた世界遺産委員会において「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」が世界文化遺産として登録されることが決定しました。

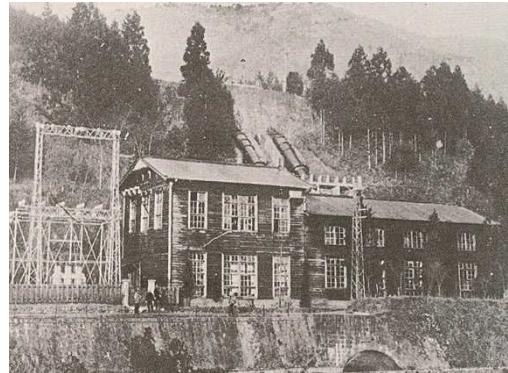


写真 1-16 旧大久保（現西山）発電所
(出典：遠藤秀雄編（1973）『目でみる富士宮の歴史』)



写真 1-17 世界遺産登録発表

※市町村合併については、1-7 ページ「(1) 市域の形成」に別途記載しています。